

# 議員は国民の主権を預かっている



聞き手

室舘 勲

(株式会社潮流社  
代表取締役社長)

前衆議院議長

おおしま ただもり  
大島 理森

——大島先生は二〇二一年の十月まで、衆議

院議長を六年六ヶ月と最長で務められました。

本日は衆議院議長というお席から見られた政治なども含めて、お話を伺いできればと思います。大島先生はどのような生い立ちで、

青年期までを過ごされましたか。

大島 生まれは一九四六年、青森県八戸市で農家の家系に生まれました。今の八戸駅の一帯は農村地帯で、地域では大きい方の農家で



大島 理森 氏

した。母が農業と地域のお世話をし、その苦労をみて父に反感を持ったこともあります。

周りの人と違ったのは、父が県議会議員をしていたということです。昔の地方議員は、事務所を構える人は少なく、父も自宅が事務所のようなもので、多くの方が家に入りにていました。また、周辺のコミュニティの場でもありました。また、青年団の相撲大会、演芸会、運動会の練習などのイベントも自宅で開催されていて、絶えず人がいたという環境で育ちました。

そういう意味では小さい頃は逆に、家族だけの空間に憧れたものです。国鉄の官舎に住んでいる友人の家に遊びに行った時に、家族だけの空間というものを見て非常に憧れてね、将来は鉄道員になりたいと思っていま

した。

ただ、叔父も代議士で、私の生活の周りには常に「政治的環境」があった、そんな幼少期でした。

——お話を伺うと、政治家になるべくしてなった、英才教育のようにも思いますね。

大島 決して英才教育ではありません。そういった環境に囲まれていた、というだけです。ただ中学生になると自意識の芽生えもあります。当時のある先生から「お前は政治家の家系だから、弁論大会に出なさい」と言われて、人前で話すのは苦手だったのに、スピーチの特訓をさせられたものです。

政治に対するアンテナは周囲より高かったかもしれません。鮮明に覚えているのは、中学二年生の時です。六〇年安保闘争の時代、

樺美智子さんという東京大学の女子学生がデモ活動の中で亡くなりました。大きく新聞に取り上げられたことが印象的で「今、世の中で何が起こっているんだろう」と疑問に思ったことを覚えています。そんな、社会や政治に対しての疑問などを抱えたまま八戸高校へと進みました。

——八戸高校は優秀な高校ですね。

**大島** 父も兄も八戸高校でしたので、私も自然とそこを目指しました。私の世代はまさに団塊の世代の始まりですから、非常に受験競争が苛烈でしたね。高校に入ってから、大学受験に向けた受験体制の中の高校生活でした。高校時代には、東京オリンピックがありました。世界に堂々と誇れる日本になったんだと誇らしく思いました。高度経済成長

たことです。私は学生で父の選挙を手伝っておりました。父の落選を目の前でみて、政治家という仕事と、選挙とは何かを痛切に感じました。当時は今のような公営掲示板ではありません。選挙後に看板を引き上げる無念さ、悔しさがありました。選挙とはこういうものかと。落選したときの父の背中を見た時に、初めて父親が「政治家」であることを感じました。今振り返ると、たぶんその時の残影が、後の政治に出る決意のきっかけ、芽生えだったのかもしれない。

——そこから実際に政治に足を踏み入れるまでの経緯をお伺いできますか。

**大島** 大学卒業後、毎日新聞社に入社しました。入社した一九七〇年は、よど号ハイジャック事件、成田闘争の激化、三島由紀夫事件

とともに生かされてきた世代だという想いもあります。

そして慶應義塾大学に進学しました。世間では六〇年安保から七十年安保と、様々なデモ活動があつて、私が入学する頃は大学紛争が激化していた時代です。慶應大学ではいわゆる「米軍資金紛争」などもありました。これらの論争の根本はベトナム戦争です。私自身、アメリカとは何か、なぜあれほどベトナムに突っ込むのかと考えていました。元々はノンポリ的な考えだったのが、ベトナム戦争を機に世の中の事を考える、そんな出来事でもありました。

——国際政治に対する興味もあつた。

**大島** とりわけ政治というものに直面したのは一九六七年。父が県議会議員選挙で落選したのもあつた年です。大阪万博など高度経済成長のプラスの面と、それによつてもたらされた、精神的な矛盾、公害などの現実的な矛盾を感じる年でした。

仕事に従事し、様々な意見と出来事に出会う中で、このまま新聞社で勤めていいのだろうかという想いも芽生えてきました。私個人が社会に対してできることは何なのか、と自問し、ある時決心しました。

そして一九七四年一月、実家に帰った時に父親に「来年の県議会議員選挙に出たい」という旨を伝えました。父は一九六七年に落選して政界から引退しておりました。父は「四月ごろには、お前の言葉に対する、父としての結論を出そう。ただし、お前が考えているほど選挙は甘くないぞ」と言っていました。



私は、父は内心、嬉しかったのではないかなと思っ  
ています。その父からの結論を心待ちにしていました。  
するとその矢先、その四月に、父が急逝

したかも知れないままでした。ですから私は生涯、街頭演説などで「父の遺志をついで」などとは言ったことはありません。父の結論を聞けなかったのですから。  
その年の八月、父の新盆に古い支持者も集まってくれました。親族や支援者も、父の後を誰かが継いでほしいという想いはあったと思います。私は決意を新たに八月末に毎日新聞社に辞表を出して、八戸に帰ってきました。

しました。

——お父様が。それは大変でしたね。

**大島** 頼りにしていた父が亡くなり、政治への想いもダメになるのかなと頭をよぎりました。私の出馬に対して、父がどんな結論を出

母に「仕事を辞めてきた」と報告したら、大変に怒られました。「世のため人のために尽くすのは、政治家だけじゃあるまい。民間でも世のため人のために尽くすことはできるだろう」と。母としては農業をしながら政治家である父を支えてきたから、その苦勞もひ

としおに感じていたんだろうと思います。その後、説得も続けて、家族にも理解してもらい、選挙活動が始まりました。

しかし選挙運動を始めても、なかなか本物の候補とは認めてくれず、誰も私が当選するなんて思っていないませんでした。風が変わったと感じたのは、四月の統一地方選挙の立会演説会。少しずつ宣伝カーの周りに人が集まるようになりました。「昔、親父さんに世話になったんだ」と、父や叔父の縁故の方々が少しずつ集まってくれて、少しずつ力を貸してくれました。選挙は蓋を開けてみれば、なんと二位当選。幸運に恵まれた、父のおかげでもあった初当選で、それが政治への入り口でした。

——そこから国政へ。

**大島** 私が県議の二期目に当選したところ、八戸の選挙区の国会議員、熊谷義雄先生が中選挙区で破れ、政界を引退。その後任としてご指名をいただきました。いったん政治への道を志したのであれば、チャンスがあれば国政に挑戦したいという想いはあったので、一九八〇年の衆議院議員選挙に挑戦。しかし結果は次点で落選しました。そこから三年半の浪人生活です。中選挙区は後援会、組織の戦いです。この三年半は毎日のように一献交わして組織を作っていました。そして一九八三年に初当選しました。

——浪人のご経験があたりだったのですね。

**大島** はい。浪人時代の三年半は辛かったです。次に当選できるかもわかりません。資金的な苦しみもあります。何より己に克たなけ



ればならない。人様に弱音を吐いてはいけない。自分を律するために仏教や哲学の本を読んだりしました。三年半の浪人時代は、それこそ父の「選挙は甘くないぞ」という言葉を痛感し、思い上がってはいけないと教えてくれた期間でした。長い目で見れば良かったのかもしれませんが。ポツと出てポツと受かってしまっていたら、傲慢で鼻持ちならない人物になっていたのではと思います。

——三十八年間の国会議員生活と、衆議院議長という役割についてお話を伺いできますか。

**大島** 議員生活を振り返れば、内閣で仕事もし、野党時代には幹事長もさせていただきました。後年は国会運営に携わることが増え、議会人だったのだと思います。議長になる前

——三権の長である衆議院議長の席から、何を見ていらつしゃいましたか。

**大島** 議長席から見て感じるのは、国会議員の先生方への敬意です。たとえば衆議院で記名投票などがある際、衆議院の四百六十五人

の先生全員と挨拶します。先生方は皆、国民の皆様のために、あの厳しい選挙を勝ち抜いた先生方なんだと思っ

て挨拶をしは、自民党という看板を強烈に背負って「自民党という政党のためにどうあるべきか、それが国民のためになる」と最優先に考えていました。自民党の看板が全てでした。

そして議長職についてからは、今度は「立法府である衆議院の長としての立場」という責任を負うことになりました。先輩からは「公平・公正・忠実であれ」と。憲法、国会法に基づいた立法府の長。その立ち位置を間違えないように、毎日のように確認して、自分に対して声をかけてきたつもりです。

赤坂宿舎から議員会館に入る手前に自民党本部があります。議長になってからは自民党本部に行くことが減りまして、在任の六年半で自民党本部に入ったのは二、三数回でした。

ます。選挙をくぐり抜けてきたことに対する敬意は忘れませんでした。当然、意見が食い違えば論争はありますが、根底には先生方への敬意があります。

国民・マスコミからのご意見・ご批判は甘んじて受ける必要があります。不祥事に対するご批判も当然あります。でも選挙を通じて、一定数の国民の支持を得て勝ち残った、国民の代弁者でもあります。その意味では温かく・厳しく議員の活動を見守ってほしいとも思います。

一方で議員の先生方には、絶えず国民の皆様が自分の行動を見ているぞという緊張感、自分たちは世のため人のために選ばれたんだ、国民の主権を預かっているんだ、という緊張感だけは忘れないでほしいと思います。そう



思って、議長職を務めさせていただきました。

——二〇一七年に成立した皇室典範の特例法、いわゆる天皇の生前退位については、大島議長でなければ、あれだけのスピード感でまもらなかったのではないかと言われています。

**大島** 上皇陛下、当時の天皇陛下のご発言は、政界にも大きな衝撃がありました。しかし、当時の安倍晋三総理大臣、菅官房長官を中心に進めていきました。

日本国憲法の第一章は「天皇」です。すなわち、太平洋戦争後の日本の天皇制は、日本人の姿を表す柱だと思っています。そして憲法には、天皇の地位は「主権の存する日本国民の総意に基く」とあります。ではその総意

本当に良かったと思いますが、まだ課題は残っております。これは、新議長、新内閣のもとで、静謐な中で結論を得てほしいという思いがあります。

——将来の日本を担う若者や、次の世代の政治家に向けて、メッセージをお願いします。

**大島** 偉そうに伝えられることはありません。私は昭和で育ち、平成で働かせていただいた政治家です。令和の時代がスタートして、次の世代が引っ張って欲しいです。世界と共存しながら、自分の道、そして日本の道を作ってもらいたいと思います。

議員の先生方に対しては、昔から変わらぬ原則があります。権力は議員にあるのではない、主権者は国民である、ということ。主権は国民にあって、議員はそれを預かって

を作る場、探す場、まとめる場はどこにあるだろうと模索しました。私の二代前の議長、伊吹文明先生からも「それは国会だろう」とアドバイスがありました。

つまりこれは、陛下のお言葉に対する国民の総意を、立法府である国会が責任を持って、政治の場における方向性を示すべきだと思いを決しました。衆参両議長、副議長、各党、各会派のご理解もいただき、これを政局の種、政局の課題には絶対にしてはならないと思いましたが。できるだけ静謐な形で、冷静に議論してもらい、あらゆる会派の人にも参加してもらおう、という形で協力してもらって、結論に向かっていきました。皆、未知の中での模索ですが、菅官房長官とも相談しつつ、特例法という形でまとめられました。

いるんだという健全な謙虚さを胸に、勇気を持って取り組んでもらいたいと思います。

——本日は貴重なお話、ありがとうございました。

■おしま・ただもり

一九四六年 青森県八戸市生まれ。

一九七五年 青森県議会議員選挙で当選。

一九八三年 第三十七回衆議院議員総選挙に立候補、初当選。

内閣にて環境庁長官、文部大臣、農林水産大臣などを歴任。

自民党にて幹事長、副総裁などを歴任。

二〇一五年四月 衆議院議長に就任。

二〇二二年十月 衆議院解散に伴い、衆議院議長を退任。在職日数二千三百三十六日は過去最長。